# 夏目漱石集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和二年六月一日印刷
昭和二年六月五日發行

現代日本文學全集　第十九篇

著者　夏目漱石

發行者　山本美
東京市麴町區內幸町一丁目參番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市麴町區內幸町一丁目參番地
幸ビルディング壹階
振替東京八四〇二番
電話銀座一七三三番
銀座四五八番
銀座五〇四六番

株式會社　秀英舍印刷

# 「夏目漱石集」目次


巻頭寫眞（筆蹟・照影）

小傳

吾輩は猫である抄……三

倫敦塔……六〇

カーライル博物館……七一

薤露行……七六

坊つちやん……九一

草枕……一五二

文鳥……二一四

永日小品抄……二二二

元日……二二三

泥棒……二二三

火鉢……二二五

猫の墓……二二七

行列……二二八

下宿……二二九

過去の匂ひ……二三一

暖かい夢……二三三

霧……二三四

昔……二三五

クレイグ先生……二三六

修善寺日記……二四一

思ひ出す事など抄……二六五

ケーベル先生……二七七

硝子戸の中抄……二八〇

道草……二九五

「夏目漱石集」の後に……小宮豐隆……四〇八

著作年表……四一二

# 漱石先生小傳

先生は慶應三年正月五日牛込の馬場下で生れ大正五年十二月九日年五十で早稲田南町七番地で亡くなつた。その亡くなつた所と生れ且つ育つた所とは、僅か四五町の一筋道で繋がつてゐる、同じ牛込區内であつた。明治四十年の秋、先生が本郷の西片町から早稲田へ越して來た時にも、思ひなしか、先生にはある特別な感情が動いてゐるらしく見えた。亡くなる前年に、先生は『硝子戸の中』の中や『道草』の中で、自分の子供の時分の思ひ出を色々に書いてゐるが、是も先生がその牛込の然も生れた場所に近く住んでゐるといふ事實の意識が、さういふ事を思ひ出させる力强い機緣の一つにはなつてゐたに違ひない。

然し先生の幼年時代は、決して幸福だとは言はれなかつた。二女三男の後に生れて、先生は親からの愛情を人並に享受する事が出來なかつた。先生はすぐ里子に出された。また間もなく養子にやられた。是がどういふ印象を先生の心に與へ、また其後先生にどういふ因緣をつくつたかは、事細かに『道草』が我我に物語つてくれる。先生が生家に歸つて來たのは七つの年である。さうして籍がちやんと復つて來たのは、先生の二十二の年である。さうしてこの年の七月に先生は、第一高等中學校の豫科を卒業して、本科に入學する事になつた。

正岡子規は作家夏目漱石を作り上げる上に必要缺くべからざる存在であつた。春秋流に言へば、正岡子規がなかつたら作家夏目漱石は存在しなかつたかも知れない。先生がその正岡さんと知り合ひになつたのは、凡そ此時分の事の樣である。

先生は大學を卒業してから松山に行つた、それから熊本へ行つた、熊本からロンドンへ行つた。ロンドンから歸つて東京に住む樣になつてから、正岡さんの弟子の高濱さんと正岡さんの殘して行つた雜誌「ホトトギス」とが、先生洋行中に亡くなつた正岡さんの代理を勤めて、先生に小說を書かせ出した。それが『吾輩は猫である』である。後に先生が、俺は何でも自分で進んでやつた事がない、發句を作るのも文章をかくのも小說を作るのも、みんな人から勸められてやり出した事だ、と言つてゐたが、まつたくそれに違ひないと思ふ。その點で先生ほど內氣な人はなかつた。さう言へば畫をかくのも、元はといふと、或は橋口さんなどから勸められて始めたものかも知れない。

先生が大學を止めて「朝日新聞」に這入つてからの事は、到る所で書かれ、誰でも知つてゐる事であるから、別に書かない。唯修善寺での大吐血は、先生の內生活に大回轉を與へた意味で、非常に重大な事件であつたといふ事丈を此所では注意するに止めて置きたいと思ふ。先生はその後殆んど每年の樣に胃潰瘍に見舞はれた。さうして最後にはその爲めに命をとられた。先生はその繼起を、天からの啓示の樣にも感じてゐたのではないかとも想像される。先生は、人を責めるより前に自分を責めようとする樣に、人を憎むよりも前に先づ人を愛さうとする樣に、さうして、ひつくるめて人間を離れて自然に卽かうとする樣に、心持が段々に變つて行つた。その心持の光を最初に感じさせるものは、先生の修善寺の日記である。また『思ひ出す事など』である。

昭和二年五月　　小宮豐隆



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

# 吾輩は猫である 抄

## 一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ〳〵した所でニャー〳〵泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くと、それは書生といふ人間で一番獰惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕まへて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考へもなかつたから別段恐ろしいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハ〳〵した感じが有つた計りである。掌の上で少し落ち附いて書生の顏を見たが、所謂人間といふものの見始めであらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも殘つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顏がつる〳〵して丸で藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會した事がない。加之顏の眞中が餘りに突起して居る。さうして其穴の中から時々ぷう〳〵と烟を吹く。どうも咽つぽくて實に弱つた。是が人間の呑む煙草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持ちに坐つて居つたが、暫らくすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が惡くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るが、あとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が附いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隱して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。はてな、何でも容子が可笑しいと、のそ〳〵這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つて、どうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫らくして泣いたら書生が又迎ひに來てくれるかと考へ附いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も來ない。其内池の上をさら〳〵と風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣き度くても聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をして、そろり〳〵と池を左に廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと、漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つたらどうにかなると思つて、竹垣の崩れた穴からとある邸内にもぐり込んだ。緣は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。偖邸へは忍び込んだものゝ、是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて來るといふ始末で、もう一刻も猶豫が出來なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つてたのだ。こゝで吾輩は

彼の書生以外の人間を再び見るべき機會に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。是は前の書生より一層亂暴な方で、吾輩を見るや否や、いきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思つたから、眼をねぶつて、運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出來ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺所へ這ひ上がつた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上がり、這ひ上がつては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつくづくいやになつた。此間おさんの三馬を偸んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、此家の主人が騷々しい何だといひながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて、此宿なしの小猫がいくら出しても出してもお臺所へ上がつて來て困りますといふ。主人は鼻の下の黑い毛を撚りながら吾輩の顏を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ、奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を利かぬ人と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顏を合はせる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたぎり殆ど出て來る事がない。家のものは大變な勉强家だと思つて居る。當人も勉强家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ樣な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく書寢をして居る事がある。時々讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黃色を帶びて彈力のない不活潑な徵候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寢て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで、彼は友達が來る度に何とかかんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても發ね附けられて相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出來得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝夜主人が新聞を讀むときは必ず彼の膝の上に乘る。彼が晝寢をするときは必ず其背中に乘る。是はあながち主人が好きといふ譯ではないが、別に構ひ手がなかつたから已むを得んのである。其後色色經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は緣側へ寢る事とした。然し一番心持ちの好いのは夜に入つてこゝのうちの子供の寢床へもぐり込んで一所にねる事である。此子供といふのは五つと三つで、夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寢る。吾輩はいつでも彼等の中間に已を容るべき餘地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが、運惡く子供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。子供は――殊に小さい方が質がわるい――猫が來た〳〵といつて夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達て抔は物差で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ない樣になつた。殊に吾輩が時々同衾する子供の如きに至つては言語道斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつつひの中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内總がゝりで追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸壘で爪を磨いだら、細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顫へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向うの白君抔は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先日玉の樣な子猫を四疋産まれたのである。所がそこの家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てて來たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戰つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤もの議論と思ふ。又隣の三毛君抔は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大いに憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鰯の臍でも一番先に見附けたものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へてよい位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて、我等が見附けた御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝのである。彼等は其强力を賴んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて澄まして居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯其日々々が何うにか斯うにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をしよう。元來此主人は何といつて人に勝れて出來る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつて「ほとゝぎす」へ投書をしたり、新體詩を「明星」へ出したり、間違ひだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはヴイオリン抔をブー〳〵鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謠をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張り是は平の宗盛にて候よい樣を繰り返して居る。皆がそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考へになつたものか、吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわたゞしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思ふと、水彩繪具と毛筆とワットマンといふ紙で、今日から謠や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日毎日書齋で書寢もしないで繪許りかいて居る。然し其のかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。當人もあまり甘くないと思つたものか、ある日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に、下の樣な話しをして居るのを聞いた。

「どうも旨くかけないものだね。人のを見ると何でもない樣だが、自ら筆をとつて見ると今更の樣に六づかしく感ずる」是は主人の述懷である。成程許りのない處だ。彼の友は金緣の眼鏡越しに主人の顏を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ。第一室内の想像計りで畫がかける譯のものではない。昔以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言つた事がある。畫

をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に霞華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活畫なりと。どうだ君も畫らしい畫をかかうと思ふなら、ちと寫生をしたら」「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。實に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金緣の裏には嘲る樣な笑ひが見えた。

其翌日吾輩は例の如く緣側に出て心持ち善く晝寢をして居たら、主人が例になく書齋から出て來て、吾輩の後で何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかと一分許り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んで居る。吾輩は此有樣を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果として先づ手始めに吾輩を寫生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寢た。欠伸がしたくて堪らない。然し折角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思うてぢつと辛抱して居つた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顏のあたりを色彩つて居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出來ではない。脊といひ毛並といひ顏の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある樣な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯産の猫の如く黃を含める淡灰色に漆の如き斑入の皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黃でもなければ黑でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるといふより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寢て居る所を寫生したのだから無理もないが、眼らしい所さへ見えないから盲猫だか寢て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでも是では仕樣がないと思つた。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居つてやり度いと思つたが、さつきから小便が催して居る。身内の筋肉はむづ〳〵する。最早一分も猶豫が出來ぬ仕儀となつたから、不得已失敬して兩足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてかうなつて見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の豫定は打ち壞したのだから、序に裏へ行つて用をたさうと思つてのそ〳〵這ひ出した。すると主人は失望と怒りを攪き交ぜた樣な聲をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴つた。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。外に惡口の言ひ樣を知らないのだから仕方がないが、今迄辛抱した人の氣も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼ばはりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乘る時に少しは好い顏でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量に慢じてみんな增長して居る。少し人間より强いものが出て來て窘めてやらなくては此先どこ迄增長するか分らない。

我儘も此位なら我慢するが、吾輩は人間の不德について是よりも數倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。廣くはないが瀟洒とした心持ち好く日の當たる所だ。うちの子供があまり騷いで樂々晝寢の出來ない時や、餘り退屈で腹加減のよくない折抔は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の氣を養ふの

が例である。ある小春の穏やかな日の二時頃であつたが、吾輩は暫飯後、快く一睡した後、運動かたゝこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本々々嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覺に寢て居る。彼は吾輩の近附くのも一向心附かざる如く、又心附くも無頓着なる如く、大きな鼾をして長々と體を横たへて眠つて居る。他の庭内に忍び入りたるものが斯く迄平氣に睡られるものかと、吾輩は竊かに其の大膽なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黑猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きら〳〵する柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる樣に思はれた。彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる體格を有して居る。吾輩の倍は慥かにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して餘念もなく眺めて居ると、靜かなる小春の風が杉垣の上から出たる梧桐の枝を輕く誘つて、ばら〳〵と二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はくわつと其眞丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は人間の珍重する琥珀といふものよりも遙かに美しく輝いて居た。彼は身動きもしない。双眸の奥から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、おめえは一體何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが、何しろ其聲の底に犬をも挫ぐべき力が籠つて居るので、吾輩は少からず恐れを抱いた。然し挨拶をしないと險呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」と可成平氣を裝つて冷然と答へた。然し此時吾輩の心臓は慥かに平時よりも烈しく鼓動して居つた。彼は大いに輕蔑せる調子で「何、猫だ？　猫が聞いてあきれらあ。全てえ何處に住んでるんだ」隨分傍若無人である。「吾輩はこゝの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事たらうと思つた。いやに痩せてるぢやねえか」と大王丈に氣燄を吹きかける。言葉附から察すると、どうも良家の猫とも思はれない。然し其脂ぎつて肥滿して居る所を見ると、御馳走を食つてるらしい、豐かに暮らして居るらしい。吾輩は「さう云ふ君は一體誰だい」と聞かざるを得なかつた。「已や車屋の黑よ」昂然たるものだ。車屋の黑は此近邊で知らぬ者なき亂暴猫である。然し車屋丈に強い計りでちつとも教育がないから、あまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になつて居る奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起こすと同時に、一方では少々輕侮の念も生じたのである。吾輩は先づ彼がどの位無學であるかを試して見ようと思つて、左の問答をして見た。

「一體車屋と教師とはどつちがえらいだらう」

「車屋の方が強いに極まつて居らあな、おめえのうちの主人を見ねえ、丸で骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫丈に大分強さうだ。車屋に居ると御馳走が食へると見えるね」

「何おれなんざ、どこの國へ行つたつて食ひ物に不自由はしねえ積りだ。おめえなんかも茶畠ばかりぐる〳〵廻つて居ねえで、ちつと已の後へくつ附いて來て見ねえ。一と月たたねえうちに見違へる樣に太れるぜ」

「追つてさう願ふ事にしよう。然し家は教師の方が車屋より大きいのに住んで居る樣に思はれる」

「笊棒め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか」

彼は大いに肝癪に障つた樣子で、寒竹をそいだ樣な耳を頻りとぴく附かせてあらゝかに立ち去つた。吾輩が車屋の黑と知己になつたのはこれからである。

其後吾輩は度々黑と邂逅する。邂逅する毎に

彼は車屋相當の氣燄を吐く。先に吾輩が耳にしたといふ不德事件も實は黑から聞いたのである。

或日、例の如く吾輩と黑は暖かい茶昌の中で寢轉びながら色々雜談をして居ると、彼はいつもの自慢話を左も新しさうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下の如く質問した。「おめえは今迄に鼠を何匹とつた事があ」知識は黑よりも餘程發達して居る積りだが腕力と勇氣とに至つては到底黑の比較にはならないと覺悟はして居たものゝ、此問に接した時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事實で詐る譯には行かないから、吾輩は「實はとらう〳〵と思つてまだ捕らない」と答へた。黑は彼の鼻の先からぴんと突張つて居る長い髭をぴり〳〵と震はせて非常に笑つた。元來黑は自慢する丈にどこか足りない所があつて、彼の氣燄を感心した樣に咽喉をころ〳〵鳴らして謹聽して居れば甚だ御し易い猫である。吾輩は彼と近附になつてから直に此呼吸を飲み込んだから、此場合にもなまじひ己を辯護して益形勢をわるくするのも愚である。いつその事、彼に自分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこで大人しく「君抔は年が年であるから大分とつたらう」とそゝのかして見た。果然彼は墻壁の缺所に吶喊して來た。「たんとでもねえが三四十はとつたらう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼は猶語をつゞけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちつてえ奴は手に合はねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」「へえ成程」と相槌を打つ。黑は大きな眼をぱちつかせて云ふ。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて緣の下へ這ひ込んだらおめえ、大きないたちの野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども、何、鼠の少し大きいぐれえのものだ。此畜生つて氣で追つかけてとう〳〵泥溝の中へ追ひ込んだと思ひねえ」「うまく遣つたね」と喝采してやる。「所がおめえ、いざつてえ段になると奴め、最後つ屁をこきやがつた。臭えの臭くねえのつて、夫からつてえものはいたちを見ると胸が惡くならあ」彼は是に至つて恰も去年の臭氣を今猶感ずる如く前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻した。吾輩も少々氣の毒な感じがする。ちつと景氣を附けてやらうと思つて、「然し鼠たら君に睨まれては百年目だらう。君は餘り鼠を捕るのが名人で、鼠計り食ふものだからそんなに肥つて色つやが善いのだらう」黑の御機嫌をとる爲の此質問は不思議にも反對の結果を呈出した。彼は喟然として大息していふ。「考げえると詰まらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあがる。交番ぢや誰が捕つたか分らねえから其たんびに五錢宛くれるぢやねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壹圓五十錢位儲けて居やがる癪に、碌なものを食はせた事もありやしねえ。おい、人間でもなあ體の善い泥棒だぜ」さすが無學の黑も此位の理窟はわかると見えて、頗る怒つた容子で背中の毛を逆立てて居る。吾輩は少々氣味が惡くなつたから善い加減に其場を胡魔化して家へ歸つた。此時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。然し黑の子分になつて鼠以外の御馳走を獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食ふよりも寢て居た方が氣樂でいゝ。教師の家に居ると猫も教師の樣な性質になると見える。用心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といへば吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩畫に於て望みのない事を悟つたものと見



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

えて、十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

○○と云ふ人に今日の會で始めて出逢つた。あの人は大分放蕩をした人だと云ふが、成程通人らしい風采をして居る。かう云ふ質の人は女に好かれるものだから○○が放蕩をしたと云ふよりも放蕩をする可く餘儀なくせられたと云ふのが適當であらう。あの人の細君は藝者ださうだ、羨ましい事である。元來放蕩家を惡くいふ人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。又放蕩家を以て自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。是等は餘儀なくされないのに無理に進んでやるのである。恰も吾輩の水彩畫に於けるが如きもので、到底卒業する氣づかひはない。然るにも關せず、自分丈は通人だと思つて澄まして居る。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るといふ論が立つなら、吾輩も一廉の水彩畫家になり得る理窟だ。吾輩の水彩畫の如きはかゝない方がましであると同じ樣に、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮の方が遙かに上等だ。

通人論は一寸首肯しかねる。又藝者の細君を羨ましい抔といふ所は教師としては口にすべからざる愚劣の考へであるが、自己の水彩畫に於ける批評眼丈は慥かなものだ。主人は斯くの如く自知の明あるにも關せず、其自惚心は中々拔けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いて居る。

昨夜は僕が水彩畫をかいて到底物にならんと思つて、そこらに抛つて置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けて、呉れた夢を見た。偖て額になつた所を見ると、我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。是なら立派なものだと獨りで眺め暮らして居ると、夜が明けて眼が覺めて、矢張り元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつて仕舞つた。

主人は夢の裡迄水彩畫の未練を背負つてあるいて居ると見える。是では水彩畫家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

主人が水彩畫を夢にみた翌日、例の金緣眼鏡の美學者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと、劈頭第一に「畫はどうかね」と口を切つた。主人は平氣な顏をして、「君の忠告に從つて寫生を力めて居るが、成程寫生をすると今迄氣のつかなかつた物の形や、色の精細な變化抔がよく分る樣だ。西洋では昔から寫生を主張した結果今日の樣に發達したものと思はれる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、又アンドレア・デル・サルトに感心する。美學者は笑ひながら「實は君、あれは出鱈目だよ」と頭を搔く。「何が」と主人はまだ翻弄された事に氣がつかない。「何がつて君の頻りに感服して居るアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕の一寸捏造した話だ。君がそんなに眞面目に信じようとは思はなかつた、ハヽヽヽ」と大喜悅の體である。吾輩は緣側で此對話を聞いて、彼の今日の日記には如何なる事が記さるゝであらうかと豫め想像せざるを得なかつた。此美學者はこんな好い加減な事を吹き散らして人を擽ぐるのを唯一の樂しみにして居る男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線に如何なる響を傳へたかを毫も顧慮せざるものの如く、得意になつて下の樣な事を饒舌つた。

「いや時々冗談を言ふと人が眞に受けるので、大いに滑稽的美感を挑撥するのは面白い。先達てある學生にニコラス・ニックルビーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる佛國革命史

を佛語で書くのをやめにして英文で出版させたと言つたら、其學生が又馬鹿に記憶のよい男で、日本文學會の演說會で眞面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であつた。所が其時の傍聽者は約三百名許りであつたが、皆熱心にそれを傾聽して居つた。夫からまだ面白い話がある。先達て或文學者の居る席でハリソンの歷史小說セオファーノの話が出たから、僕はあれは歷史小說の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬ所は鬼氣人を襲ふ樣だと評したら、僕の向うに坐つて居る知らんと云つた事のない先生が、さう〳〵あすこは實に名文だといつた。それで僕は此男も矢張り僕同樣此小說を讀んで居らないといふ事を知つた」神經胃弱性の主人は眼を丸くして問ひかけた。「そんな出鱈目をいつて若し相手が讀んで居たらどうする積りだ」「恰も人を欺くのは差し支へない、只化の皮があらはれた時は困るぢやないかと感じたものの如くである。美學者は少しも動じない。「なに其時や別の本と間違へたとか何とか云ふ計りさ」と云つてげら〳〵笑つて居る。此美學者は金緣の眼鏡は掛けて居るが、其性質が車屋の黑に似た所がある。主人は默つて「日の出」を輪に吹いて、吾輩にはそんな勇氣はないと云はん許りの顏をして居る。美學者はそれだから畫をかいても駄目だといふ目附で、「然し冗談は冗談だが、畫といふものは實際六づかしいものだよ。レオナルド・ダ・ギンチは門下生に寺院の壁のしみを寫せと敎へた事があるさうだ。なる程雪隱抔に這入つて雨の漏る壁を餘念なく眺めて居ると、中々うまい模樣畫が自然に出來て居るぜ。君、注意して寫生して見給へ、屹度面白いものが出來るから」「又欺すのだらう」「いえ是丈は慥かだよ。實際奇警な語ぢやないか、ギンチでもいひさうな事だあね」「成程奇警には相違ないな」と主人は半分降參をした。然し彼はまだ雪隱で寫生はせぬ樣だ。

車屋の黑は其後跛になつた。彼の光澤ある毛は漸々色が褪めて拔けて來る。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の眼には眼脂が一杯たまつて居る。殊に著しく吾輩の注意を惹いたのは彼の元氣の消沈と其體格の惡くなつた事である。吾輩が例の茶園で彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら、「いたちの最後屁と肴屋の天秤棒には懲り〳〵だ」といつた。

赤松の間に二三段の紅葉は昔の夢の如く散つて、つくばひに近く代る〴〵花瓣をこぼした紅白の山茶花も殘りなく落ち盡した。三間半の南向の緣側に冬の日脚が傾いて木枯の吹かない日は殆ど稀になつてから、吾輩の書寢の時間も狹められた樣な氣がする。

主人は毎日學校へ行く。歸ると書齋へ立て籠る。人が來ると、敎師が厭だ〳〵といふ。水彩畫も滅多にかかない。タカヂヤスターゼも功能がないといつてやめて仕舞つた。子供は感心に休まないで幼稚園へかよふ。歸ると唱歌を歌つて、毬をついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食はないから別段肥りもしないが、先づ〳〵健康で跛にもならずに其日々〳〵を暮らして居る。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌ひである。名前はまだつけて呉れないが、慾をいつても際限がないから生涯此敎師の家で無名の猫で終る積りだ。

## 二

吾輩は新年來多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるゝのは難有い。

元朝早々主人の許へ一枚の絵葉書が來た。是は彼の交友某畫家からの年始狀であるが、上部を赤、下部を深綠で塗つて、其の眞中に一の動物が蹲踞つて居る所をパステルでかいてある。主人は例の書齋で此繪を横から見たり、

堅から眺めたりして、うまい色だなといふ。既に一應感服したものだから、もうやめにするかと思ふと、矢張り横から見たり、縱から見たりして居る。からだを拗ぢ向けたり、手を伸ばして年寄が三世相を見る樣にしたり、又は窓の方へむいて鼻の先迄持つて來たりして見て居る。早くやめて呉れないと膝が搖れて險呑でたまらない。漸くの事で動搖が餘り劇しくなくなつたと思つたら、小さな聲で一體何をかいたのだらうと云ふ。主人は繪端書の色には感服したが、かいてある動物の正體が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ繪端書かと思ひながら、寢て居た眼を上品に半ば開いて、落ち附き拂つて見ると紛れもない自分の肖像だ。主人の樣にアンドレア・デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、畫家丈に形體も色彩もちやんと整つて出來て居る。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫ぢやない、吾輩である事が判然とわかる樣に立派に描いてある。この位明瞭な事を分らずにかく迄苦心するかと思ふと、少し人間が氣の毒になる。出來る事なら其繪が吾輩であると云ふ事を知らしてやりたい。吾輩であると云ふ事は好し分らないにしても、せめて猫であるといふ事丈は分らして遣りたい。然し人間といふものは到底吾輩猫族の言語を解し得る位に天の惠に浴して居らん動物であるから、殘念ながら其儘にして置いた。

一寸讀者に斷つて置きたいが、元來人間が何ぞといふと猫猫と、事もなげに輕侮の口調を以て吾輩を評價する癖があるは甚だよくない。人間の糟から牛と馬が出來て、牛と馬の糞から猫が製造された如く考へるのは、自分の無智に心附かんで高慢な顔をする教師抔には有り勝ちの事でもあらうが、はたから見て餘り見つともいゝものぢやない。いくら猫だつて、さう粗末簡便には出來ぬ。よそ目には一列一體、平等無差別、どの猫も自家固有の特色抔はない樣であるが、猫の社會に這入つて見ると中々複雜なもので、十人十色といふ人間界の話は其儘こゝにも應用が出來るのである。目附でも、鼻附でも、毛並でも、足並でも、みんな違ふ。髭の張り具合から耳の立ち按排、尻尾の垂れ加減に至る迄同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌ひ、粹無粹の數を盡して千差萬別と云つても差し支へない位である。其樣に判然たる區別が存して居るにも關はらず、人間の眼は只向上とか何とかいつて、空ばかり見て居るものだから、吾等の性質は無論、相貌の末を識別する事すら到底出來ぬのは氣の毒だ。同類相求むとは昔からある語ださうだが、其通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事なら矢張り猫でなくては分らぬ。いくら人間が發達したつて是計りは駄目である。況んや實際をいふと彼等が自ら信じて居る如くえらくも何ともないのだから猶更六づかしい。又況んや同情に乏しい吾輩の主人の如きは、相互を殘りなく解するといふが愛の第一義であるといふことすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の惡い牡蠣の如く書齋に吸ひ附いて、嘗て外界に向つて口を開いた事がない。それで自分丈は頗る達觀した樣な面構へをして居るのは一寸可笑しい。達觀しない證據には、現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた樣子もなく、今年は征露の第二年目だから大方熊の畫だらうと氣の知れぬことをいつて澄まして居るのでもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながら斯く考へて居ると、やがて下女が第二の繪端書を持つて來た。見ると活版で、舶來の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉强をして居る。その内の一疋は席を離れ

て机の角で西洋の猫ぢや猫ぢやを踊つて居る。其上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側に、書を讀むや踊るや猫の春一日といふ俳句さへ認められてある。是は主人の舊門下生より來たので、誰が見たつて一見して意味がわかる筈であるのに、辺濶な主人はまだ悟らないと見えて不思議さうに首を捻つて、はてな、今年は猫の年かなと獨り言をいつた。吾輩が是程有名になつたのを未だ氣が着かずに居ると見える。

所へ下女が又第三の端書を持つてくる。今度は繪端書ではない。恭賀新年とかいて、傍に午恐縮かの猫へも宜しく御傳聲奉願上候とある。如何に迂遠な主人でも、かう明らさまに書いてあれば分るものと見えて、漸く氣が附いた樣にフンと云ひながら吾輩の顏を見た。其眼附が今迄とは違つて多少尊敬の意を含んで居る樣に思はれた。今迄世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新面目を施したのも、全く吾輩の御蔭だと思へば、此位の眼附は至當だらうと考へる。

折柄門の格子がチリン、チリン、チリ、ンと鳴る。大方來客であらう。來客なら下女が取次に出る。吾輩は看屋の梅公がくる時の外は出ない事に極めて居るのだから、平氣で、もとの如く主人の膝に坐つて居つた。すると主人は高利貸にでも飛び込まれた樣に不安な顏附をして玄關の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間も此位偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのに、夫程の勇氣も無い。愈牡蠣の根性をあらはして居る。しばらくすると下女が來て、寒月さんが御出でになりましたといふ。此寒月といふ男は矢張り主人の舊門下生であつたさうだが、今では學校を卒業して、何でも主人より立派になつて居るといふ話である。此男がどういふ譯か、よく主人の所へ遊びに來る。來ると自分を慕つて居る女が有りさうな、無ささうな、世の中が面白さうな、詰まらなさうな、凄い樣な、艷つぽい樣な文句計り並べては歸る。主人の樣なしなび懸けた人間を求めて、態々こんな話をしに來るからして合點が行かぬが、あの牡蠣的主人がそんな談話を聞いて時々畳槌を打つのは猶面白い。

「暫らく御無沙汰をしました。實は去年の暮から大いに活動して居るものですから、出よう出ようと思つても、つい此方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見た樣な事をいふ。「どつちの方角へ足が向くかね」と主人は眞面目な顏をして、黒木綿の紋附羽織の袖口を引つ張る。此羽織は木綿でいきが短かい、下からべんべら物が左右へ五分位宛はみ出して居る。「エヘヘ、少し違つた方角で」と寒月君が笑ふ。見ると今日は前齒が一枚缺けて居る。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を轉じた。「えゝ實はある所で椎茸を食ひましてね」「何を食つたつて？」「其の、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘を前齒で嚙み切らうとしたらぽろりと齒が缺けましたよ」「椎茸で前齒がかけるなんざ、何だか爺臭いね。俳句にはなるかも知れないが、戀にはならん樣だな」と平手で吾輩の頭を輕く叩く。「あゝ其猫が例のですか、中々肥つてるぢやありませんか、夫なら車屋の黒にだつて負けさうもありませんね、立派なものだ」と寒月君は大いに吾輩を賞める。「近頃大分大きくなつたのさ」と自慢さうに頭をぽか〳〵なぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏會をやりましてね」と寒月君は又話をもとへ戻す。「どこで？」「どこでも、そりや御聞きにならんでもよいでせう。ヴイオリンが三挺とピヤノの伴奏で中々面白かつたです。ヴイオリンも三挺位になると下手でも聞かれるもの

ですね。二人は女で、私が其中へまじりましたが、自分でもよく彈けたと思ひました」「ふん、そして其女といふのは何者かね」と主人は羨ましさうに問ひかける。元來主人は平常枯木寒巖の樣な顏附はして居るもの、實の所は決して婦人に冷淡な方ではない。嘗て西洋の或小說を讀んだら、其中にある一人物が出て來て、其が大抵の婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往來を通る婦人の七割弱には戀着するといふ事が諷刺的に書いてあつたのを見て、これは眞理だと感心した位な男である。そんな浮氣な男が何故牡蠣的生涯を送つて居るかと云ふのは吾輩猫抔には到底分らない。或人は失戀の爲だとも云ふし、或人は胃弱のせゐだとも云ふし、又或人は金がなくて臆病な性質だからと云ふ。どつちにしたつて明治の歷史に關係する程な人物でもないのだから構はない。然し寒月君の女連れを羨ましい氣に尋ねた事丈は事實である。寒月君は面白さうに口取の蒲鉾を箸で挾んで半分前齒で食ひ切つた。吾輩は又試はせぬかと心配したが、今度は大丈夫であつた。「なに二人とも去る所の令孃ですよ、御存じの方ぢやありません」と餘所々々しい返事をする。「ナール」と主人は引つ張つたが「程」を略して考へて居る。寒月君はもう善い加減な時分だと思つたものか、「どうも好い天氣ですな、御閑なら御一所に散歩でもしませうか、旅順が落ちたので市中は大變な景氣ですよ」と促して見る。主人は旅順の陷落より女連れの身元を聞きたいと云ふ顏で、しばらく考へ込んで居たが、漸く決心をしたものと見えて、「それぢや出るとしよう」と思ひ切つて立つ。矢張り黑木綿の紋附羽織に、兄の記念とかいふ二十年來着古した結城紬の綿入を着たまゝである。いくら結城紬が丈夫だつて、かう着つぱなしではたまらない。所々が薄くなつて、日に透かして見ると裏からつぎを當てた針の目が見える。主人の服裝には師走も正月もない。ふだん着も餘所ゆきもない。出るときは懷手をしてぶらりと出る。外に着る物がないからか、有つても面倒だから着換へないのか、吾輩には分らぬ。但し此丈は失戀の爲とも思はれない。

兩人が出て行つたあとで、吾輩は一寸失敬して寒月君の食ひ切つた蒲鉾の殘りを頂戴した。吾輩も此頃では普通一般の猫ではない。先づ桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を偸んだ猫位の資格は充分あると思ふ。車屋の黑抔は固より眼中にない。蒲鉾の一切位頂戴したつて人から彼此云はれる事もなからう。それに此の人目を忍んで間食するといふ癖は、何も吾輩猫族に限つた事ではない。うちのお三抔はよく細君の留守中に餅菓子抔を失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬して居る。お三計りぢやない。現に上品な仕附を受けつゝあると細君から吹聽せられて居る小兒ですら此傾向がある。四五日前のことであつたが、二人の子供が馬鹿に早くから眼を覺まして、まだ主人夫婦の寢て居る間に、對ひ合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食ふ麵麭の幾分に、砂糖をつけて食ふのが例であるが、此日は丁度砂糖壺が卓の上に置かれて匙さへ添へてあつた。いつもの樣に砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくひ出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。暫らく兩人は睨み合つて居たが、大きいのが又匙をとつて一杯をわが皿の上に加へた。小さいのもすぐ匙をとつてわが分量を姉と同一にした。すると姉が又一杯すくつた。妹も負けずに一杯を附加した。姉が又壺へ手を懸ける、妹が又匙をとる。見てる間に一杯一杯と重なつて、遂には兩人の皿には山盛

の砂糖が堆くなつて、壺の中には一匙の砂糖も餘つて居らん樣になつたとき、主人が寢ぼけ眼を擦りながら寢室を出て、切角しやくひ出した砂糖を元の如く壺の中へ入れて仕舞つた。こんな所を見ると、人間は利己主義から割り出した公平といふ念は猫より優つて居るかも知れぬが、智慧は却つて猫より劣つて居る樣だ。そんなに山盛にしないうちに早く嘗めて仕舞へばいいにと思つたが、例の如く、吾輩の言ふ事抔は通じないのだから、氣の毒ながら御櫃の上から默つて見物して居た。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩いたものか、其晩遲く歸つて來て、翌日食卓についたのは九時頃であつた。例の御櫃の上から拜見して居ると、主人はだまつて雜煮を食つて居る。代へては食ひ、代へては食ふ。餅の切は小さいが、何でも六切か七切食つて、最後の一切を椀の中へ殘して、もうよさうと箸を置いた。他人がそんな我儘をすると、中々承知しないのであるが、主人の威光を振り廻して得意なる彼は、濁つた汁の中に焦げ爛れた餅の死骸を見て平氣で澄まして居る。細君が袋戸の奥からタカヂヤスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飲まん」といふ。「でもあなた、澱粉質のものには大變功能があるさうですから、召し上がつたらいゝでせう」と飲ませたがる。「澱粉だらうが何だらうが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きつぽい」と細君が獨り言の樣にいふ。「厭きつぽいのぢやない、藥が利かんのだ」「それだつて先達て中は大變によく利く〳〵と仰しやつて毎日々々上がつたぢやありませんか」「此間うちは利いたのだよ、此頃は利かないのだよ」と對句の樣な返事をする。「そんなに飲んだり止めたりしちや、いくら功能のある藥でも利く氣遣ひはありません。もう少し辛抱が能なくつちやあ胃弱なんぞは外の病氣たあ違つて直らないわねえ」と御盆を持つて控へたお三を顧る。「それは本當の所で御座います。もう少し召し上がつて御覽にならないと、とても善い藥か惡い藥かわかりますまい」とお三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいゝ、飲まんのだから飲まんのだ。女なんかに何がわかるものか、默つて居ろ」「どうせ女ですわ」と細君がタカヂヤスターゼを主人の前へ突き附けて、是非詰腹を切らせようとする。主人は何も云はず立つて書齋へ這入る。細君とお三は顔を見合はせてにや〳〵と笑ふ。こんなときに後からくつ附いて行つて膝の上へ乘ると、大變な目に逢はされるから、そつと庭から廻つて書齋の緣側へ上がつて障子の隙から覗いて見ると、主人はエピクテタスとか云ふ人の本を披いて見て居つた。もしそれが平常の通りわかるなら一寸えらい所がある。五六分すると其本を叩き附ける樣に机の上へ拋り出す。大方そんな事だらうと思ひながら猶注意して居ると、今度は日記帳を出して下の樣な事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、神田邊を散歩、池の端の待合の前で藝者が潮模樣の春着をきて羽根をついて居た。衣裝は美しいが顔は頗るまづい。何となくうちの猫に似て居た。

何も顔のまづい例に特に吾輩を出さなくつても、よささうなものだ。吾輩だつて喜多床へ行つて顔さへ剃つて貰やあ、そんなに人間と異つた所はありやしない。人間はかう自惚れて居るから困る。

寶丹の角を曲がると、又一人藝者が來た。是は春のすらりとした撫肩の恰好よく出來上がつた女で、着て居る薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い齒を出して笑ひながら一源ちやん昨夕は——つ



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com